
別に何も始まらない冒険

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別に何も始まらない冒険

【著者名】

Z8583Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

一人の少女の魔王を倒す旅が始まる…………と思つたらそうでも無く。

…………てかそもそも魔王は悪い事とかしてない世界だった。

びっひかと言えば、ほんのりなお話し。

フワリ村…じいは名のとおり平和な村。ここに勇者を夢見る一人の少女がいた。そしてその少女は魔王を倒す旅に出るために村長に旅に出る許可をもら以に来ていた。

「村長！魔王を倒すための旅に出る許可をください…」

「別にいいよ？」

村長は鼻をほじりながら少女に軽く旅立ちの許可を出した。少女は村長が余りにも軽いノリで旅立ちの許可を出すものだから激しく動搖する。

「え、え、え、え…………？ そんなに軽いノリで許可を出していいんですかあ！？」

「何だよ。旅、行きたくねーのかよ？」

村長は少女の反応に面倒くさがりにしながら鼻毛をちぎりひとつしながらそつと言つた。

「いや、行きたく無いわけじゃないんですけど。普通は村のかわいい女の子が旅に行こうとしたら止めるもんじゃないですか？」

「かわいい女の子？ なんの何処にいんの？」

村長はモテる百の方法と言つ本を読み始めながら少女にそつと言つた。

村長の言葉に少女は額に青筋を浮かべながら頬をひくつかせていた。

「村長、私に喧嘩売つてるんですか？…てか何で本を読んでんですか！」

「ひむせーな。モテたいと思つて悪いのかよ？」「

そう言いながら村長は鏡を見て自分の数少ない髪をかっこよく整えようとしていた。

少女は、もう村長の相手をするのが嫌になつたので村長の家を出て旅に行く…前に村長にある事をお願いする。

「旅立ちの資金ください。」

「ヤダよ。バーカ。」

村長は少女の願いをあつさりと蹴つた。少女は村長があつさりと自分の要求を断つたので自分の背に背負つていた剣を引き抜き村長に向けた。

「いいから資金くださいよ村長？」

「オメーそれプラスチックの剣だろ？そんなんでワシを斬せんと思つてんの？」「

村長は剣を向けられ斬されるがプラスチック製と分かつたのでビビらなかつた。だが少女は『ふつ』と不適に笑う。

「甘いですよ。村長、私はプラスチック製の剣で岩を真つ一本に出来るんですよ！」「

自信満々にそう少女は言つた。だが村長は、そんな少女の自信満々の態度を鼻で笑つた。

「バカじやねーのお前? プラスチック製の剣で岩が斬れるわけねーじゃん?」

村長は少女を明らかに見下した顔をしてそう言つた。少女は村長のそんな態度を見ると村長が自分を異常なほど美化して作った銅像に近づき。

スパンツ

真つ二つ斬り裂いた。村長は少女が銅像を真つ二つにしたのを見ると同時に玄関に向かつてダッシュして逃げようとしていたが。

ヒュッ カツ

少女がテーブルに置いていたフルーツナイフを投げてきたので村長はビビッて動きを止めた。

「ダメですよ。村長、私に資金も渡さないでお出かけしちゃ?」

「幾らいるんすか?」

村長は少女が結構ヤベェ事をしてくるのでお金を渡す事を決めた。村長が幾らいると聞くと少女は指を五本たてた。

「五ゴーラード?」

「五万ゴーラードです。」

少女はキッパリとそう言った。村長は財布をまさぐると五万ゴーラードをひやんと少女に渡した。少女はお金を受け取るとこり笑いながら剣を鞘に納めた。

「じゃ、行つておますー。」

少女は、そう言つと村長の家を出て旅に出るのだった。少女が家から出で行くのを見ると村長は怒りを込めながら「じつほふ。

「一度と村に帰つてくんバツ キヤローが！！」

しかしその叫びが少女に届かないのはいつまでも無い。

広い大草原。少女はそこに立ちひづれ。

（私の魔王を倒す旅が始まるんだ。……で魔王って何処にいるんだっけ？）

旅は始まる。……少女の魔王を倒す

だいじちわ まほうつかいがなかまになつた(前書き)

なかまがたいとねぶおつぶくわぬよー!

だいいちわ まほうつかいがなかまになつた

私、シャーロ＝ブレイブは今、ジマーハの町に来ています。えつ？
名前急に言つなよつて？別にいいじゃんどーでも。

…… そんな事より私がこの町に来た理由は魔法使いを仲間にするためなのだ！旅に魔法は必要だからね！

…… えつ？お前は勇者だから魔法あんじやねーかつて？
…… 私は魔法使えないタイプの勇者なんだよチクショー！！！

「 嬢ちゃん、なに一人でぶつぶつ言つてんだけ？」

「 何でもありません。」

やべー…… 变人扱いされるとこひだつた……。
それよりもとつとと強そうな魔法使いを探すか。
仲間探しと言つたら……。

「 やつぱり酒場だよね！」

私、未成年だけど仲間探すだけだし入つてもいいよね？
…… でかもう入っちゃてるけど……。

「 強い魔法使いは私の仲間になつてね 」

私はウインクをしながらそう言つた。

私のかわいいウインクで仲間にならない奴は感性が腐つてゐるね！

シャーユはそう思つてゐるが實際はテーマのウインク」とで仲間になる奴が感性が腐つてゐる。

酒場の人達は皆、つわづなんだこいつとまともな反応をしてくれい。

「あれ？……全然仲間になりに来ないよ……感性腐つてんのかてめーらあーー！」

シャーユがそう怒鳴つても酒場の人達は怒るどころか無視。まあ、こいつは相手にするだけ面倒くさいと感じたんだろう。

「チクシヨー！無視は一番酷い、いじめなんだぞー！お前らそれやつて恥ずかしくないのかよーー！」

じやあテメーの感性腐つてる発言はどうなんだよ？
酒場の人達はきっと皆そう思つたに違いないな。

「ねえ、強い魔法使い教えてよー。」

「知らねえよーー？」

シャーユは酒飲んでるおっさんの服を掴んでひっぱりながら強い魔法使いの事を聞く。

おっさんは凄く迷惑そうな顔をしてゐる。

「きっと魔法使いが仲間になりに来ないのは酒場にいなかん
で強い魔法使いの居場所を教えろよ。」

「知らねえって言つてんじゃん！？……といか仲間になりに来ないの
はお前の態度の問……」

ガンツ！

シャーユはプラスチックの剣を鞘から抜くとおっさんを殴りつけた。
おっさんは目にお星さまを浮かべている。

「ち……他に魔法使いの居場所とか知つている人はいませんか
？」

シャーユは口だけ笑つて、目は全く笑つていらない顔でそう酒場の人
達に言つた。

すると酒場の人達の一人が手をあげた。
恐怖から早く解放されたいんだな……。

「大魔法使いがマジマジの森にいると聞いたことが……。」

「本当に……じゃあさつやくマジマジの森へー！」

シャーノはやつぱりマジマジの森に向かって行った。

そしてシャーノはマジマジの森にたどり着く。

「絶体、森の奥にいるよな大魔法使い……モンスターどうしよう……逃げまくればいいか！」

シャーノは超ヘタレ勇者の称号を手にした。

「今、不名誉なものを貰つた気がするけど気にせず森の奥に進むぞ！」

シャーノは途中モンスターに遭遇しても逃げまくり森の奥に進む。そして一つのボロ小屋にたどり着いた。

「よつしゃー！絶体、大魔法使いがいるよね、この小屋ー！」

魔物や盗賊がいそうだな……この小屋。だがアホのシャーノは警戒もせず小屋に入つていく……そしてシャーノの旅は終わ……

「うなじよー？」

「ひとんちでうるせーなオメーはー！」

シャーユがなんか地の文に反応して大声を出すと小屋に住んでた奴がシャーユに文句を言つた。
確かにシャーユはうるせえな。

「……なんか想像してたのと違つ……。」

シャーユは小屋に住んでる男を見て自分の想像の大魔法使い像と違つたので落胆した。

現実はそんなもんだよ。

とりあえず小屋に住んでる奴の特徴を表すなら顔はブサ……面白い顔をしていて、髪型はタケノコ……いや、ユニークな髪型をしている。

「髪型は言つて切つてるよー！？」

テメーまで反応してくんないよタケノコヘアーガ。

「あんた本当に大魔法使い？」

シャーユは疑わしき目でタケノコにそう聞く。
「ぶっちゃけこいつ大魔法使いなわけねーじゃん。
だつてタケノコだよ?」

「ふつふつふつ…………大魔法使いさ、俺…………の師匠が。」

「無駄足だつたな、せつせと森から出よ。」

シャーユはタケノコが大魔法使いじゃないと完全にわかると森からさつさと出ようとする。

「ちよつ…待てよ~久しぶりのお客さんだからもうつと話そつよ~。」

「うわっー、うぜーなライツ。」

タケノ口は話し相手がほしいがためにシャーロクを引き止めるがシャーロクはめちゃくちゃうざうざにする。
あつ、シャーロクが剣に手をかけた。

「あんましつけーと真つ一いつにすんぞー。」

「真っ二つは勘弁です！」

タケノコはシャーロの真つ一つ宣言を拒否した。

真つ一つもそつや誰もなりたくないよな……。

「俺、いつ見えて凄い魔法使えるのよ?」

「じゃー、見せや。」

タケノ口の凄い魔法使えるぜ発言!シャーノは冷めた態度をとる。使えそうにならしないつ……。

「じゃあこべぞ……シャック!」

「……何も起き……ひやつへ……」

何も起きないと思つたら急にシャーノはしゃつくりをしました。しゃつくりをしだしたシャーノを見てタケノ口は不適に笑つ。

「ふつふつふつ……どうだシャックの威力はー。」

「シャックつて……ひやつ……しゃつくりをすれば……ひやつ……魔ひやつく法か……ひやつ……よ。」

シャーノせしゃつてのせこでまともに喋れなことつだ。しゃつくつて地味こくのよな……。

「しゃつくりをするせいで相手はまともに喋れなくなる。…凄い魔
法だろシャックは！」

おおむねだべく、さこひだり。

「なんか苦しそうだな…わかっただぜ。シャツク解除！」

ルーフタケノ口が皿ついでシヤーパのシヤウベツセムタコと止めた。

「確かに地味にくるわシャツク。……まあ、こんな奴でもいいよ
りはましか。……よしあんた仲間になりなさいタケノコ！」

「俺、タケノコがいい加減に仕事しないからね。」
「あいつが前があるからねー。」

「じゃあ、ポコ。私と一緒に魔王を倒しに行こうかー！」

「魔王退治ー?.....お前、今の魔王は昔とは違.....」

「ヤクニルル」

ポコはシャーノに向か言おうとするがシャーノはポコの言葉を無視してポコを引きずり旅を続ける事にした。

「話聞けよ～！？」

ボウの叫びが虚しくじだましたのは言つまでもなかつた。

ショボい魔法使いポコが仲間になつた！

だいいちわ まほうつかいがなかまになつた（後書き）

超ヘタレ勇者

逃げまくりダンジョンを突破しようとするとダメ勇者にふさわしい称号。

はつやうじつて不名誉な称号です。

だいにわ タセツだ まむつ(前書き)

まむつがありわれた

だいにわ ナキヒツだ まおつ

私、シャーロとタケノコは…

「タケノコじやねえよー。ボコだよー。」

……ボコは今、魔王の情報集めのために情報がいっぱいあるホウジヨの町に来ています。

だつて私、正直さあ魔王の事なんにも知らないんだよね。マジで。

「それなのによく魔王を倒すとか言つてんな、シャーロ。」

「つむせーな、ボコ。私は行き当たりばつたり派なんだよー。」

「わけわからぬーよー!？」

シャーロの言葉を理解できずに驚くしかないタケノコ。
シャーロの言葉は確かに理解不能なので仕方ないよ。

「町の人に魔王の事を聞いてみよー。」

そう言つてシャーロは魔王の情報を町の人から集めよつとす。

「おこ待てよ、シャーロー。」

「魔王の情報、知りませんか！」
「魔王の情報？ああ、知ってるよ。今、あそここの道具屋に魔王の娘が来ているんだよ。これがまた……」
「魔王がシャーノを呼び止めようとするがシャーノはタケノ口言葉など聞かずさつさと情報集めをしていた。
まあ、仕方ないよ。タケノ口。

町の人が何か言いおえる前にシャーノはポコを引きずり道具屋に向かっていた。
人の話しへ最後まで聞けよ……。

「まいどあり。おつかいをいつもして偉いねえ、エレネちゃんは。

「…………うかがな…………？…………お使いをするのは普通…………です…………。」

見た目が小動物的かわいらしさのちっちゃい女の子がおつかいをして誉められていた。
すると道具屋の扉が突然開き……。

「魔王の娘は、いねえが～。」

そんな感じの言葉を吐きながら「を引きずったシャーユが道具屋に入つて來た。

引きずられたポコがボロボロだぞ、おい。

「……私が魔王の娘……です……。」

「お前が魔王の娘……よしあとつてきてー。」

シャーユがそいつが魔王の娘でエレネと呼ばれた子はそれを拒否する。
理由は……。

「……知らない人に……ついてつちや……ダメつて……お父さんが……言つてました……。」

もつともな理由だった。

だがシャーユは当然そんな言葉は無視する。

「ひつなつたら力づくだあ！」

「さやー！」

エレネの腕を掴み無理矢理どこかへと連れて行つた。

道具屋の店長がそれを止めようとしたがシャーロにやられたのは言うまでもない。

そしてシャーロは現在、人気の少ない人さらにとかがよく隠れてそういう場所にいた。

「…………シャーロ、お前なにしてんの？」

「なにって人質作戦だけど？」

ポコが暗い表情をしてシャーロに聞くとシャーロは平然とした顔で勇者がまずは使わない作戦名を口にした。
ポコはシャーロの行動にツッコミをいれる。

「なにさらつと言つてんの！？人質作戦つて普通は勇者は使わないよ！普通は悪党のよく使う作戦だよね！？」

「いいじゃん勇者が使つても、それよりもポコ。
脅迫文を書いたから魔王に送りたいんだけど……。」

シャーロは勇者が普通は生涯書かないであろう物を書いていた。
「…………こいつダメだ。」

「脅迫文って普通は勇者は書かないよね……？」

「そんなことはいいから脅迫文を送る魔法ねーのかよ？」

「手紙を配達する魔法ならあるだろ名前は……ハイターツだ。」

「お前、今考えただろ？」

シャーユはタケノコの魔法名を言う間がけつこうかかったので今考えたと疑惑をもつがタケノコはそれを無視し魔法の説明を始める。

「この魔法は配達先の人の名前を手紙に言いハイターツと言えばその人の所へ届く魔法だ。」

「同姓同名だつたらどうすんだよ？」

シャーユがそうタケノコにツッコムがタケノコはそれを無視した。
…………考へてなかつたな。

「それよりも名前を知らないては手紙は送れない。」

「そつか……君、えーと名前は？」

シャーユは魔王の娘の名を呼ぼうとするが知らないので聞いた。

「…………え、Hレネ……「ラヴィアイ……です……。」

怯えながらも自分の名を答えるHレネ。

答えるあや怖こじとわれると黙つたんだな……。

「Hレネ、貴女の父親…ようは魔王の名は?」

「…………ニクス…………お父さん…………ですか…………。」

父親の名も体を小刻みに震わせながら答えるHレネ。

あれ? これシャーロは悪党じゃね?

「よし以前はわかつたし、ポロ、はよ送れや。」

そつ面つてシャーロはポロに齧迫丈を渡す。

「…………送らないとシャーロにぶつとばされんだろうな…………すまん、魔王の娘さぞ。…………ニクス=「ラヴィアイにハイターッ!」

ポロが魔法を唱えると齧迫丈は飛んでいった。
魔王の元へと向かったのだ。

場所は変わつて魔王の城…………今、魔王はあることを考えていた。
そのあることとは……。

「世界が都市化していくのは仕方ないことだがやはり自然をないが
しろしてはいけない。それに都市化により大量に出てしまう産業廃
棄物もどうにかしなくては。まだまだ解決しなくてはいけない議題
が沢山あるな。」

世界の行く末をまじめに考えていた。

……良い人じやん。

そんな世界の行く末を考える魔王の元へあの手紙というか脅迫文が
届いた。

「何だこれは？手紙……私宛かな？」

魔王は手紙を開けると衝撃的なことが書かれていた。その内容とは
……。

『魔王へ。貴様の娘は預かつた！返してほしくば貴様を一発で倒せ
る誰にでも使える伝説の剣を持つてこの場所に来い！当然魔王貴様
自身がだ！』

……と言つ内容だつた。

魔王は当然驚いて……

「娘が誘拐された！？」「

……と叫んだ。同時に部屋の外にいた騎士団長が魔王の部屋に慌てて入つて来た。

「魔王様、それは真ですか！？」「

「うむ……娘の帰りも遅いし本当だらう……私は行かなくては。」

魔王がそう言つと騎士団長は慌てて魔王を止める。

「なりません！魔王様！……私が姫様を助けて参ります。」

騎士団長は魔王が行くのは危険だと思いそう言つが魔王はそれを拒否した。

「ならぬ……相手は私を指名してるのだ。代わりの者を向かわせては娘が危ない。だから私が行くのだ。……騎士団長トゥル！」「

「はつ、何でしちゃうか！」

「私が死んだら世界を頼む……。」「

魔王はそう言って伝説の剣を持つて指定の場所へと向かった。

……これ魔王が勇者みたいだな。

場所は変わつてシャーユが人質と一緒にいる人気の少ない所。

「魔王、遅えな。」

「勇者がいつも魔王を待たせてるんだからたまには勇者が待つてもいいだろ。」

シャーユとポコが何気ない話をしていると魔王はちやんとやって来た。

「娘を返してくれー伝説の剣はちやんと持つてきたー。」

「あんたが魔王（うわー、強そー）か、……娘を返してほしくばまづは伝説の剣をこつちに渡せー！」

「シャーユ、今のお前全然勇者じやねーぞ？」

ポコがシャーユにそつつかないがシャーユは無視する。

魔王はシャーユの言葉を聞くと伝説の剣をシャーユの方へ普通にキ

ヤツチできる早さで渡した。

そしてシャーゴはそれをキヤツチして手にする。

「さあ、剣は渡したぞ。」

「娘は、お前を倒したら解放してやるよ。」

シャーゴはそういうとポコにコレネを預ける。
ポコは、えつーーーとなつてるとシャーゴは気にしない。

「私を倒せば娘は解放するんだな？」

「ああ、もちろん（魔王の娘なんて生かすわけねーだろ、ばーかー）。

シャーゴは最低のことを考えながら伝説の剣を鞘から引き抜く。
ポコはシャーゴがマジで魔王を殺しつとしてるのを見ると、止めようとする。

「シャーゴ、待て！ 今の魔王は悪人じゃなくて善…」

「死ね魔王！」

ポコの話を聞かずに魔王に斬りかかるシャーゴ。
自分の話を聞かないシャーゴを見てポコは

「人の話聞けよおーー！」

と叫ぶがシャーユには届いていなかつた。

……おや？ ポコのとこにエレネがいないな？

……と思つたらエレネは自分の父親を庇いに行つてゐた。
シャーユは当然エレネが父親を庇いに入つたもんだから剣を降りおろすのを中断してゐた。

「……お父さんを……殺さないで……！」

涙をポロポロ流しながらそうシャーユに必死に訴えかけるエレネ。
……これシャーユが完全に悪人だろ。

「ハハハ……！」

シャーユはエレネの必死の訴えを見ると剣を手離して地面上に落とし、膝をついた。

「チキシヨー！ 斬れるかあ！ これどう見ても私が悪人じゃん！」

「今気づいたのかよ！？」

ポコはシャーユが今更自分が悪人であることを気づいたことに驚く。
シャーユは、はなつから悪人だつたしな。

「チキシヨー……なんだよその健気な姿は私、自分がめちゃくちゃ惨めにならじやんよお……。」

「うんうん、確かに今のお前惨めだよね。」

ポコがシャーノに言いつづけ、本来なら攻撃されるがシャーノは今はしないよつだ。

「！」みんなさーい！全部あいつが提案したんですね……！。」

そう言ってシャーノはポコを指した。

ポコは当然驚いた顔になる。

「こや作戦全部考えたのお前じやん！？それに俺なんどもお前止めよつとしたけどお前が全く人の話を聞かなかつたんじやねえか！！」

ポコはヤツリシャーノに言つ返す。

「でもテメーも脅迫文を送るのは手伝つたよな？

「何だかわからないが娘が戻つて來たので良かつた。」

「…………。」

エレネはシャーレに近づいて行った。

シャーレは近づいてくるエレネを生氣のない目で見る。

「…………何?」

「…………あ、あの…………私と…………お友だちに…………なつて…………くれる…………?」

エレネは衝撃的な発言をした。

シャーレはその言葉を聞いて口を開けて驚いている。

「何で? 私は貴女を人質に……。」

「…………それはもう……いいの…………だって……貴女は反省…………してゐ
かり…………。」

エレネはシャーレが行動を悔いるのを見て許していたようだ。

心広いな……普通は父親殺そうとした奴はゐるさんだな。

「あの凄く内氣なエレネが友達になつてだなんて言葉を使つ口がく
るとは、…………私は今猛烈に感動しているー。」

父親は父親で自分を殺そつとした奴と友達にならうとしている娘を見
て感動していた。

…………気にならないのかよ。やっぱ魔王家族の方が正義っぽいわ。

「私なんかが友達でいいの……？」

「…………うん……だって貴女と……いると……楽しそう……だから……。」「……」

「いやいやこいつと一緒にいると、結構正直なこと言おうとしてたのに……」

ポコが何か言おうとするときシャーロクの拳がポコの顔面を捉えていた。ポコ、結構正直なこと言おうとしてたのに……。

「エレネちゃん！私達は無一の親友だよー！」

そつとシャーロクはエレネを抱きしめる。するとエレネはちょっと照れていた。

「娘に友達ができた祝いに今日はパーティーを開こう！お友達の一人も一緒にパーティーに是非とも来てくださいー！」

「パーティー！？いいんですかー！よっしゃーーー……あれ一人？ポコも入つてんの？」

シャーロクはポコもエレネの友達なのかと疑問に思った。しかしそれについてエレネが答えた。

「……シャーノの……友達は……私の友達……。」

なるほど友達の友達は友達だといつ考えのよつだ。
しかしシャーノはそれを否定しよつとする。

「いや、あいつは友達じゃ……」

「ああ、早く城に戻つてパーティにしましょつか魔王さん!」

いつの間にか復活していたボコがシャーノの言葉を遮り、魔王に城に早く戻ろうと申し立てた。

言葉を遮られたシャーノは一瞬不機嫌になつたがすぐにまつ、いつかと気にしないことにした。

「では、我が魔王城にあなた達を招待しましょう。」

魔王がそう言つと地面に魔方陣が展開し閃光が走るとその場にシャーノ達はいなかつた。

だいにわ ナキヒツだ まおつ(後書き)

次回は変態メイドが登場だ！

「お嬢様のことを考えると私は『ご飯が百杯いきます。』

今までこんなよ……。

だいじょくわ まねりこなう (前書き)

へんたいめいじがおらわねた へんたいめいじは?.?.?.をしてくる

だいせんわ まおひじょう

「うわっ…すっげえ…。」

なにこの城まじでケーよ立派だよ。あと真っ黒じゃねーよ何この城、魔王の城っぽくねーよ。

「シャーノ殿？」

ボーッとしてじりじりしたのですか？」

「なんでもないっす。

じゃ、失礼しまーす！」

入り口の扉を開けると魔王城の中に入る。中もやっぱり立派だった。スゲーな私の家とは大違いだよ。

何だシャーノ？

お前貧乏なの？

「うるせーな！

貧乏だよこのヤロー！」

「地の文に向かって叫んでんじゃねーよシャーノ。」

「うるせーぞ！

クソタケノコー！」

「誰がタケノコだ！」

シャーノとタケノコが言に合つてると一人のメイドがやつて來た。

「魔王さま。お嬢様。
お帰りなさいませ。」

メイドは魔王とエレネに頭をぺ「コトトヅヤシツ」た。

「つむ。ラストとエレネのお友達を密間にまで」案内してくれ。」

「かしこまりました。魔王様。ではお嬢様とそのお友達のお二人は
私について来てください。」

「はーいー。」

「よくできた、メイドさんだな。」

シャー「達はラストと呼ばれたメイド」ついていき。密間に向か
う。
しまじく歩くと密間についた。

「うひゅーーー?超豪華じゃんーー。」

「うつやーーーソファーだな。」

「…………一人ともくつろいで……私、紅茶淹れてくるね…………。」

エレネがそう言つて紅茶を入れてこよのとするとラストがエレネ
を止める。

「ダメですよ?お嬢様。」

私が紅茶を淹れて来ますから。」

「……でも一人は私の友だちだから……だから私が紅茶を淹れたいの……。」

エレネはそう言つがラストは紅茶を淹れにいくのを許そつとい。

「ダメです！ダメです！

お嬢様が紅茶を淹れる時にお湯で火傷をしたらビックリするんですか！？
そうなつたら私はお嬢様に紅茶を淹れさせようとしたらお友達を殺…
……いや、私やお友達が悲しみますよー…？」

「あれ？今このメイドさん、凄い」と言おつとしなかつた？

「ボクはラストが言おつとした凄いことを気にするがラストはボクの反応はガン無視した。そしてエレネはラストにそう言われシウンとしながら紅茶を淹れにいくのを諦めた。

「…………ごめんね…………。」

「いいのいいの。確かにエレネちゃんが火傷をするのは嫌だからね。

」

「よく言つセイシャーノ。

お前はエレネ誘拐して魔王倒そつとしたよつな奴のくせに。」

タケノコがそう言つとラストの目が急に血走つた。

だがシャーノはそれ気づかずに笑いながらボクに言葉を返した。

「はつはつは…まあ、昔のことじやない？

今は私とHレネちゃんは親友でしょ!よ。」

「今はな……つて!?

おニシャーゴ!後ろ!!?

ポコはシャーゴの後ろを指さして慌てた表情をする。

そんなポコのようすを見てシャーゴが振り返ると後ろには般若のような顔をしたラストが立っていた。しかも手には銀のテーブルナイフを持っている。

「あの?メイドさん?
なんでそんな顔を?

あと手に持ってるナイフは何のために?」

「決まつている…貴様ら一人をハつ裂きにすためだああ!-!-」

「一人つてことは俺も頭数にはいつてんの!-!-」

ポコは驚愕の表情をしてそう言つが、ラストはバックに激しい憤怒の炎を燃やしながら「つづ叫んだ。

「貴様もその女の仲間だから当然だああ!-!-!-」

「うそ——ん!-!-?」

「たんまたんま!-?
ちょつとメイドさん。

私とエレネちゃんは今は親友だからね!-?」

「でもお嬢様を誘拐し恐怖を『えた。

それは万死にあたいするものだああ……」

ラストの溢れる怒りは止まらない。

「マジでシャーロコ達をハツ裂きにしそうだ。
だがしかしエレネがシャーロコ達の前にふるふると震えながら庇い
にはいった。するとラストは

シャーロコ達をハツ裂きにしそうとするのをやめた。そしてシャーロ
コ達を見てこう言った。

「お嬢様の優しさに感謝するんだな。……ではお嬢様、私はお紅茶を
淹れて
来ますので。」

そう言つたあとラストは紅茶を淹れに向かった。
ラストが紅茶を淹れにいくのを見るとエレネは一人の方を申し訳
なさそうな顔で見た。

「……ごめんね……ラストは私のことを思つてあんな行動に……だ
から、ラストを責めないで……。」

エレネがそうオドオドしながらシャーロコは「カッ」と笑つて
答えた。

「許すもなにも。元はと言えば私が悪いんだから気にしないよ。」

「全くその通りだぜ。
おかげで俺までハツ裂きになりそうだったぞ。」

ボコがそう文句をシャーロコに言つたがシャーロコはそれを無視した。

「つて無視かよ、おい！？」

「パーティー楽しみだね。エレネちゃん。」

「……うん、シャーロちゃん……。」

「お嬢様。お紅茶を淹れてまいりました。」

ラストは三人分の紅茶を持つてシャーロ達の元へ戻つて来ていた。そして紅茶を三人に配る。特にエレネのところへ置くときは丁寧にした。

「……ありがと……ラスト……。」

「ありがときお言葉を感謝いたします。お嬢様。」

エレネに礼を言われるとラストは頭をペコリ下げそつといた。

三人は紅茶を飲み始める。すると紅茶を飲んでいたシャーロが突然ラストにあることを聞いた。

「メイドさんは何でエレネちゃんをお嬢様つて呼んでるの？普通は魔王の娘だから姫様じゃないの？」

「それはお嬢様と言つのは私にとってのエレネ様の愛称のようなのだからです。」

「……それに魔王は王様と言つよりは今は称号みたなものなんだよ……シャーロちゃん……。」

「ふーん。そうなんだ。」

シャーロは納得すると紅茶を再び飲み始める。

「お嬢様。私はパーティの『駆走』の準備をさせていただきますので失礼いたします。」

「…………うん、みひしぐね…………。」

そう言つとラストは客間に出て厨房に向かった。シャーロは『駆走』と聞くと思わずにはやけていた。

「なににやけてんだシャーロ?」

「えへへへ!」駆走かあ。

「いやしいな…」コイツ。

しばらく時間が経つとラストが客間にシャーロ達を呼びに来た。

「準備が出来たので大食堂へ来てください。お嬢様。最高の料理ができていますよ。」

そう言つとラストはシャーロ達を大食堂に連れていく。そして大食堂につくとテーブルの上には『駆走』が沢山あった。

「スゴイ!…?」

「Hレネのお友達の皆様。どうぞ席へついてください。」

魔王がやつらつとシャーノ達は席に座る。

「「」れ本当に食べていいの？」

「ええ、もううん。」

シャーノは魔王にやつらつわると料理にがつついた。

「うんめえーー。」

「おお、本当にこつややつこな。」

シャーノ達は料理を食べてやつらつと喜び次々に料理を口にしていく。
そして途中シャーノがコレネとお喋りしたりポコがなぜかぶつとば
されたりした。

42

それからしばらくしてシャーノが席から立ち上がり。

「お手洗いに行つてきます。」

と並ぶ部屋を出た。

「シャーノ殿はお手洗いの場所を知らない筈だが？ラスト、シャー
ノ殿をお手洗いに案内…おや？」

魔王がシャーノをトイレに案内するよつとラストにやつらつしたが
なぜかいなかつた。

「ラストは何処に行つたんだ？」

そしてトイレに向かつたシャーベはトイレの場所が分からず、つるつるしていた。

「トイレの場所そう言えば知らなかつたよ… だつてここ初めてくるんだもの。……あれ? この部屋… 扉がちょっと開いてる?」

シャーロは扉が少し開いてる部屋を見つけた。扉を見てみるとエレネのへやと書かれていた。恐らくエレネが昔、書いたものだろう。

「何か部屋の中から音がするな…まさか泥棒！？」

そう思つたシャーペは部屋の中に入つた。泥棒を撃退するために。しかしエレネの部屋にいたのは…。頭に恐らくエレネのものと思われるパンツを被つてさらにエレネのものと思われるパンツを嗅いでいるラストだつた。

ースーハースーハースーハースーハー、ああ、お嬢様のパンツはいくらでも嗅げますね。…ってシャーノさん…？」

変態メイドがシャーノの存在に気づく。気づかれたシャーノはすぐには逃げようとするが変態メイドに捕まえられた。

「お待ちくださいー何をするつもり何ですかー…？」

「そんなの魔王さんに今見たことを言つてあんたをクビにするんだよーーこんな危ない人をエレネちゃんの側にはおいておけないからねーー！」

そうシャーノが言つと変態メイドはキヨトンした顔をした。

「今見たこと？私が何をしたんですか？」

「エレネちゃんのパンツを…」

シャーノが何か言おうとすると言つて變態メイドは頭に被つていたパンツと嗅いでいたパンツを口に入れて「ゴクンと飲みこんでしまった。

「パンツ？何のことですか？」

「普通の人ができるない証拠隠滅をやつたよこの人…！」

シャーノは変態メイドのしたことに驚くしかなかった。そりやそうだ。

「証拠がないのに言つてもただの嘘つきですか？」

「クッソー！変態メイドめ！」

「ハハハハハ！何とでも言こなさい！」

変態メイドは勝ち誇つた顔をするがその顔は崩される。ある人物の登場によつて。

「ラスト……お前またか……。」

「貴様はトウル！？」

「トウル？」

シャーロは？となるがトウルと呼ばれた人物はシャーロに自己紹介をする。

「私は魔王様につかえる騎士団長トウル＝ロイヤリティと言つものだ。」

前は誘拐犯、現在は姫様の友達のシャーロ殿よ。」

「ゆ、誘拐犯つて……間違つてはないから何も言えないや……。」

シャーロは言われたことが本当のことなので何も言ひ返せなかつた。

トウルはシャーロに自己紹介をすると変態メイドを睨みつけた。

「ラスト……」の前も私は注意したよな？

「やうだっけ？」

ペキッ

「ラスト…ちよつとこつち来い。」

「なつ、離せ！」

トウルはラストを引きずり何処かへ行つた。
シャーユはその光景をポカーンと見ていた。
そしてシャーユはあることを思い出した。

「私そりゃあお手洗いに行こうとしてたんだ！？…うつ、漏れそ
う。早くお手洗いの場所探さなきや。」

シャーユはお手洗いの場所を慌てて探しに行くのだった。

翌日…変態メイドのラストはボロボロになつていた。何があつたか
は皆さまの『想像におまかせします。

ラストは超変態メイドの称号を手に入れた。

だいせきわ もおひじゅつ (後遺症)

超変態メイド

お嬢様に溢れる愛が止まらないことから超変態行為に及んでしまったメイドで『えれる称』。

もつ変態行為は止まんなよ

セントラル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583z/>

別に何も始まらない冒険

2011年12月31日17時00分発行